

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019年 8月 28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究所

職 名・学 年 博士後期課程1年

氏 名 原田 麻衣

助 成 の 種 類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第21回国際美学会		
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発 表 題 目	Screenplay as a Medium: The Case of Truffaut's Works		
開 催 場 所	ベオグラード大学、ベオグラード、セルビア		
渡 航 期 間	2019年 7月 20日 ～ 2019年 7月 29日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券	180,000円
		宿泊費	50,000円
		大会参加費	15,000円
		滞在費	35,000円
	資料作成費	20,000円	
	(端数切り捨て)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要

京都大学大学院人間・環境学研究所

博士後期課程1年 原田 麻衣

1. 国際会議概要

国際会議名：21st International Congress of Aesthetics

主催：International Association for Aesthetics

開催場所：ベオグラード大学（セルビア・ベオグラード）

開催期間：2019年7月22日～2019年7月26日

今回参加した第21回国際美学会は、「現代美学の可能世界：歴史、地理、メディアをめぐる美学」をテーマとし、16のトピックからなる研究発表と12のラウンドテーブルを通して、ヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、アフリカ、オーストラリア各地における現代美学の様相をマッピングすることを目的としたものであった。

2. 研究発表概要

報告者は、“Contemporary Aesthetics of Visual Arts”というセッションにおいて、“Screenplay as a Medium : The Case of Truffaut’s Works”と題した研究発表を行った。この発表は、フランスの映画監督フランソワ・トリュフォー（1932-1984）の脚本資料の精査を通して、トリュフォーにおける脚本資料が、映画撮影のための「アウトライン」以上の機能を果たしていることを論じるものであった。今回はジャン=ピエール・レオーを主人公に据えた「ドワネル」シリーズ——『大人は判ってくれない』（1959）、『アントワヌとコレット』（1962）、『夜霧の恋人たち』（1968）、『家庭』（1970）、『逃げ去る恋』（1979）——を取り上げた。このシリーズのうち、最初の4作品の脚本は『アントワヌ・ドワネルの冒険』（1970）と題された脚本集として出版され、これまでこの本が「脚本」として扱われてきた。しかし一次調査を進めるなかで、それらは映画作品が完成したのちに改めて書かれたものであることが判明した。では、撮影前の脚本と、映画完成後の脚本（以下完成版脚本と記す）にはどのような違いがみられるのか。それは「観客」を示唆する言葉の有無である。撮影前脚本と完成版脚本において注目すべきは、内容に変更がみられないものの、文体に変更が加えられている点である。前者では「誰／何が見ているのか」という視点が書き込まれているのに対し、後者ではそれがほとんど抜け落ちている。とりわけ、「nous [私たちは]」という語には意識的

であるといえる。そもそも、脚本にこの語を使用すること自体、特筆すべきことなのだが（たいてい不定代名詞 on が使用される）、より重要なのはこの点がトリュフォー作品に通底する観客の問題に接続することである。トリュフォー作品の特徴として、擬似 POV ショット（一見登場人物の視点に見えるがそうではないショット）の使用や、登場人物による語りなど、観客の存在を意識した演出が挙げられる。したがって、今回の脚本資料と映像の比較検討からは、映像だけでは不明瞭な「観客」の存在が脚本資料に認められること、また、脚本生成の段階から「観客」を意識していることが判明した。その意味でトリュフォー作品における脚本資料は、それ自体が固有の文体をもつ、文学と映画の間に位置する一つのメディアウムとして機能していると考えられる。

3. 参加の成果

参加の成果としてはとりわけ以下の三点を挙げたい。

第一に、質疑応答では司会からのコメントと三名からの質問を受け、今後の調査検討に不可欠な点を確認することができた。まず、フランス語話者にこの発表にかんする意見をいただけたことはとても幸運だった。報告者の研究は、フランス語の言葉や文体に大きく依拠するものであるため、とりわけフランス語話者による意見は必要不可欠である。ここで分析の結果について肯定的な評価をいただけたことは、これからの研究に対するモチベーションの向上につながった。その他二名の指摘は、他監督による脚本資料との比較にかんしてであった。ここで具体的にジャン＝リュック・ゴダールとアルフレッド・ヒッチコックの名が挙げられたことは、報告者にとって大変示唆的であった。

第二に、「現代美学の可能世界」という大きなテーマのもとで「メディア」にかかわる多くの研究発表を聞くことができ、新たな方法論や美学研究のトレンドを知ることができた。この点は、映画を研究対象とし、とりわけメディアウムの混交に関心をもつ報告者にとって非常に有益なものであった。また、なかなか多分野の、そして最新の研究に触れる機会がないため、国際学会に出席し、他研究者による研究発表から学びを得ることの重要性を痛感する機会となった。

第三に、初めての国際学会での発表を通して、大きなテーマのもと多分野・多国籍の研究者が集まるなかで発表を行う場合、発表の形式や題材の切り取り方など、基礎的な部分で工夫が必要であることを実感した。この点において報告者の発表はより適切な方法を取れたはずであり、今後の機会に生かしたいと思う。

4. 謝辞

今回、日本から遠く離れたセルビアでの学会に参加できたのは、京都大学教育研究振興財団による助成があったからに他ならない。先述したように、自身の研究について他言語で発表し、様々な国・地域の研究者と意見交換を行うことは、視野を広げ、研究の精度を上げるために大変重要である。しかしながら、海外での発表となると必要不可欠な経費の面でその好機を逃しうることもおおいに考えられる。そのようななか、十分な支援をしてくださった貴財団による取り組みに敬意を表するとともに、改めて深くお礼申し上げたい。